

# 『セルフネグレクトと父親——虐待と自己放棄のはざままで』

石川瞭子[編著]、青弓社、2019年

[評者]

篠山昂平

SHINOYAMA Kohei

本書は聖隷クリストファー大学大学院社会福祉学研究所の元教授である編著者と同研究科博士前期課程修了者・後期課程在籍者の計7名による8つの論考と編著者の石川による序章・終章によって構成されている。石川の在職中に刊行された『サイレントマザー——貧困のなかで沈黙する母親と子ども虐待』（青弓社、2017年）の続編という扱いになっており、前著では重大な局面で助けを求めることができない母親の生活を可視化し、子ども虐待の予防がどの段階から可能かを論じていた。本書では同じく沈黙する父親の生活に焦点を当て、子ども虐待と父親の精神的状況（セルフネグレクト）との関連から子ども虐待の防止を検討している。

第1章「五人の虐待父親とセルフネグレクトの関係」（石川瞭子）では、2017年から2018年にかけて発生した5つの虐待事件の事例からセルフネグレクトと虐待の関わりについて言及している。ここで確認されている「セルフネグレクト」の定義とは「厭世気分陥った自己喪失」である（90頁）。本章は、男は仕事を通して社会における自身の階層と他層との格差を意識させられるため、それと対峙した際の自己喪失がDVや子ども虐待につながるると論じている。格差に対する自己喪失は社会の要求する「男らしさ」「父親らしさ」とそれに満たない自身の姿を映し出すことによるが、それでも自身の体面を守ろうとすることは権力の誤用、すなわち暴力へと駆り立てられるというカラクリである。そこには既存の「男らしさ」「父親らしさ」に負けた男の悲しさの存在が示唆されている。

第2章「父親であること——社会格差の現実の中で」（石川瞭子）では、社会格差は経済格差に始まり、経済格差が地域格差を、地域格差が教育格差を生むといった連鎖構造にあることを示している。そして大元の経済格差を埋めるための犠牲となるのは家事であり母親であることから、行き着く先は母親のセルフネグレクトと子どもの虐待でしかないという「絶望」に至ると論じている。章末では、この「絶望」から救うためには社会格差の根本にいたる父親を救済すべきだと主張している。

第3章から第8章は多様化する父親の生活実態を挙げ、そこから起こり

うる虐待の防止策を検討する章となるが、文学作品における父子家庭表象を研究している評者にとって特に注目すべき議論を含んでいるのは、第3章「ステップファミリーとセルフネグレクトの継父」（佐藤真真）と第5章「シングルファザー——苦悩の果てに」（小楠美貴）である。

第3章ではステップファミリー（再婚や事実婚などにより誕生した血縁のない親子関係の家庭形態）の継父による実際に起きた虐待事件の例を1つ挙げ、その継父の視座から虐待を検証している。ステップファミリーは「いわゆる『普通の』家族」とは形成過程が異なり、すでに母親と子どもの親子関係が成り立っているところに継父が加わることになるが、継父は自分に子どもができたことを好意的に捉えることが多い。継父は自身の存在理由を「父親であること」に求め、「父親をすること」を自分の存在証明としがちだからである。しかし子供は「忠誠葛藤」と呼ばれる心理状態に陥ることがある。忠誠葛藤とは、父親・母親のどちらか一方に対し忠誠を誓おうとする、もう一方を裏切ることになり、その間で板挟みになってしまう心理状態のことである。これはステップファミリーでも見られ、継子が継父に忠誠を誓うことは実父に対する裏切りだと考えてしまい継父に対し素直に従うことができなくなる。継父は素直に従わない継子が自分を拒否していると思い、自身の存在意義を不安定なものにされてしまう。そして存在意義を揺るがされた継父はより強い力で継子を支配しなければならず、それが虐待へつなげると論じている。

第5章「シングルファザー——苦悩の果てに」（小楠美貴）では離婚によって子供を一人で育てることになったシングルファザーの事例を取り上げ、セルフネグレクトに至った背景を分析している。まず、父子家庭の父親が抱える問題について先行研究から引用し、家事・育児に必然的に従事することで、父子家庭となる前に就いていた仕事の困難があることを示している。次に、父親が家事・育児・仕事という3つの役割意識の葛藤に陥り、男性としてのアイデンティティが揺らぐことに言及している。また、社会的には日本に残る性役割分業の意識が、シングルファザーの男性が家事をすることに対するサポートを妨げており、父親自身が内包する性役割分業の規範も他者に助けを求めることを阻む可能性があることについても言及している。父子家庭に対する無理解と十分でないサポート体制によって職業の限定や賃金の低下を招きやすいなどの社会の機能不能についても述べられており、父親と社会との2つの観点からシングルファザーがセルフネグレクトに至るまでの経緯を明らかにしている。

この2つの章は「父子家庭」という正面から論じられることの少なかったテーマを領域横断的に捉える視座を提供していると評者は考える。父子家庭とステップファミリーとは隣り合わせの問題であり、本書で挙げられ

ている継父を含むステップファミリーとシングルファザーは「疎外される父親」という問題を抱える点で同質のものでもある。父子家庭とステップファミリーという連続する2つの形態について、本書の全体を貫く「虐待の防止」という視点から行われた、心理状況の解説・社会的背景の検証・虐待に至るまでの変化する父親の心情の推測は、父子家庭に対する心理学的・社会的・社会福祉学的アプローチである。そしてこれらのアプローチが、父子家庭研究に対するより多様なアプローチへの足がかりにもなっているように感じる。

評者はここで父子家庭に対する文学的アプローチを試みたい。評者が取り上げた2つの章で行われたそれぞれの領域からのアプローチは「社会の要請する父親像」と「疎外された父親の実態」との乖離や、「いわゆる『普通の』家族」の父親と父子家庭の父親を比較して父子家庭が陥りやすい特有の問題を示したことによって、逆説的に「虐待のない父子家庭」を浮かび上がらせている。それはすなわち「普遍的な父子家庭」であり、父子家庭の文学作品における表象を研究するという、普遍性を持つ領域からアプローチを行うことで、個々の事例をノンフィクション的に取り上げなければならない社会福祉学的アプローチでの限界を超え、父子家庭研究の領域自体も広げることができるのではないかと考える。

また「家族」とは一定不変のものではなく、家族形態も家族に対する考え方も絶えず変化し続けている。本書は2017年と2018年という限定された年代における父子家庭の事例を取り上げているため、この先5年、10年と時間が経過すれば本書で行われている考察とはまた異なった社会状況を迎えることになるはずだ。しかしその限定性は父子家庭研究を縦の流れで検討する際に明確な比較対象となるだろう。

本書は「2010年代末の父子家庭」という、領域を横断し時間を縦断する基準点として、現在だけでなくこの先の父子家庭研究においても大いに寄与するものになるだろうと評者は考える。